

- ① 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか？

今回研修に参加して強く感じたのが、環境先進国としてのドイツのさまざまな取り組みよりも、日本とドイツの「違い」の部分だった。そしてそれは、歴史や文化、宗教の違い、それによって生じる国民性の違いによるところが大きい。

私が感じたところによると、ドイツ人の文化は「主張する文化」だ。自分がどのような考えを持っているのか、なんでそう思うのかをきちんと主張する。自主自律を重んじ、周りの意見に流されることなく自分の行動は自分の「自由意志 (freibich) で決める。もし意見が対立したなら、徹底的に議論を交わす。議論に十分な時間をかけた上で、それでも決まらないなら多数決で全体の意思決定をする。

このようなしっかりとした民主主義をベースにドイツの社会は動いている。環境保護団体にしてもまた然りで、NABU や BUND といった大きな団体から聞いたのだが、環境問題に関して課題や意見が出るのは必ず現場からだそうだ。つまり組織のボトムから出る。そしてその意見は何度も議論を重ねながら最終的に連邦 (国) レベルまで上がり、国や行政への意見として提示される。一番下のレベルの現場からでた意見が国の法律を変えることさえあるのだ。これは日本では考えられない。日本の多くの組織の意思決定システムはいまだにトップダウンだ。人々の多くは「自由意思」で動くのではなく、周りの顔色を見ながら自分の意見をそろそろと決める。たとえ強い自分の意思があっても意見を上げたとしても、多くの場合それがトップまで届くことはない。それが日本の組織のスタンダードなのだと思う。日本を動かしている基本的なシステムは「察しと思いやり」だ。そういった社会では、個人の意見が全体を動かすということとはきわめて考えにくい。

従ってドイツの多くの事例は、残念ながらそのままでは日本で生かすことはできないと考える。環境先進国、途上国であるという違い以前に、そもそも国民性と社会の仕組みが違いすぎる。とはいえ、FOJ などの優れた人材育成の仕組みや、国にモノ申すための数10万人単位の環境保護団体、ファンドレイジングの仕組みなど、我々日本人がドイツの事例から学ぶべきことはとても多いように思われる。

ではどうしたら良いのだろうか？何を学び、生かすべきなのだろうか？

一番のヒントになるのは「数は力」という論理だと思う。今回訪問した NABU にしても BUND にしても 50 万人に迫るほどの会員数を誇っている。そしてその数の力を背景として、社会や政治にモノ申すことができ（会員数は選挙における票数なので）、国もそれを無視することができない。翻って日本の環境団体を見ると、それほど大きな組織は存在しない。また組織の体制としても一枚岩ではなく、意思決定のシステムは必ずしもボトムアップではない。

そう考えた時、日本の活動において大事なことは、自分の団体に共感してくれて、共に歩むことができる「仲間」をふやすことではないだろうか？情報発信をこまめにし、味方やファンをふやしていく。その際、必ずしも「組織化」し、自分の組織を大きくする必要はないと思う。ドイツのような組織は、社会への影響力を考えたときに確かに重要だ。しかし、文化も国民性も違う日本ではああいった大規模な組織を作るのは難しいように思う。ドイツの環境保護団体は活動しているメンバーの多くがボランティアだ。そして団体に関わること、自分の地域を自分で守ること、社会に貢献することがある種の「誇り」や「名誉」になっていると感じる。だから組織に入りボランティア活動をする。日本のボランティアとはそもそも関わる動機からして違うように思う。

それよりも日本では、組織にとらわれない広範な「ネットワーク」の方が重要であると考えます。組織の枠にとらわれず、個人、法人にこだわらず自分の「味方」をふやしていく。SNS やさまざまな情報発信のツールが増えた現在、個人でも情報発信はできるし、つながって行けるだろう。

次にドイツから学ぶ点は「楽しさ」であると思う。ドイツの環境団体の特徴のひとつは「楽しさ」であると思う。ドイツの環境団体には、実は環境活動を職業としている人は少ない。そのほとんどがボランティアであるにもかかわらず、多くの会員が積極的に「楽しく」活動に参加している。また、社会にさまざまな問題を提起するときにデモを行っているが、デモの雰囲気は日本とは全く違うという。ドイツのデモは「楽しい」のだ。だから多くの人に参加するし続けることができる。日本での、例えば原発反対のデモを考えた時、すごく真面目な雰囲気があるし、真面目すぎてときに悲壮感さえ漂ったりする。必要な問題を扱うときにこそ「楽しさ」が重要になってくるのではないだろうか。

ドイツから学ぶ点、生かすべき点の三つ目は「あきらめないこと、続けること」だと思う。ドイツではボトムアップが重要視され、やがてそれが国に届くが、しかしそのためにはたいへん長い年月を費やす。ある法律の改正の問題を

扱った時には、組織としての合意に至るまでに二年を費やしたという。また、特に BUND は法律的、政治的なアプローチをすることが多いため「五年間戦って勝ち取った」「私たちは30年間戦い続けている」といった話を聞いた。この粘り強さ、あきらめないこと、続けることこそ、日本の団体がドイツから学ぶべき最大の点なのではないだろうか。

② 研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するためにどのような仕組みが考えられるか？

先に述べた通り、日本の団体は一般的に小さく、ドイツの団体のように全国をネットワークしている団体は少ない。そして私もそうであるが、そういった団体は地域に根を張り、地道に細々と、しかし確実に意義のある活動をしている。地域密着の有意義な取り組みをしてはいるが、一方で大きな団体と比べて認知度が低く、集客での苦労や、行政からの支援もなかなか受けづらい状況があるように思う。

であれば、一番の支援となるのはそういった団体をネットワークし、情報やマンパワー、資材等を共有できる仕組みづくりではないだろうか？私も帰国後、今回研修で学んだことを四国地域の多くの団体に伝え、共有して行きたいと思う。今回の学んだドイツの環境団体の運営方法や意思決定のシステム、ファンドレージングや森の幼稚園の実際は、多くの団体が知りたいノウハウだと思うからだ。そしてそれをきっかけに多くの団体とネットワークを組み、私の活動する中四国地域で情報や人材を共有できる仕組みを作りたい。

また、これから帰国後は本研修の OB 組織「環境ボランティアリーダー会」として活動することになる。聞けばすでに先輩方が50名以上いるとのこと。この全国規模のネットワーク組織は、今後の活動を占う上で大きな力になる。リーダー会の活動にも積極的に参加し、社会への発信や情報共有に努めたいと思う。

③ 全体を通しての感想

今回の研修は実に刺激的で、実りの多い旅だった。一番の収穫は先に述べたようなドイツと日本との国民性の違いを肌で感じられたことだ。そして国民性だけでなく「自然観」も日本と全く異なっていることに驚いた。

ドイツ人は自然を分析的、理論的に理解しようとする。対して日本人は自然を感覚的、情緒的に理解する。この違いは大きい。それを一番強く感じたのは

森の幼稚園の視察だった。先生に「子ども達に接する上で大切にしていること」を聞くと、自然への恐怖感を取り除くこと、そのためには自然の仕組みと、自然は人間が守らなければならないことを教えることだと答えた。これには参加者一同違和感をおぼえた。参加メンバーの中には日本で森のようちえんを実施しているものが複数いたが、いずれもドイツの森の幼稚園の体験や雰囲気そのものは日本と全く変わらないという印象をうけた。しかし、めざしているところ、指導者の心構えが全く違うのである。日本の森のようちえんの多くは自然の中で幼い頃から過ごすことにより、自然への「畏敬の念」を育もうとする。「畏敬の念」とは、どこか「人間は自然には適わない」という謙虚な気持ちを含むものだ。対してドイツ人がめざしているのは「自然は人間が守って行かねばならない、管理しなければならない」というようなものだ。どちらがいい悪いではないが、スタンスが全く反対である。

同じような感覚を他の場所でも感じた。それはいくつかのビジターセンターなのだが、自然保護地域であっても特定の種を保護するために、自然に手を加えたりする。例えば採石場の跡地を自然再生地として保全し、環境の変化を見守っているのだが、そこに住むある種のハチを守るために斜面の木々を伐採しているのだ。さらに驚くのが、自然にまかせた環境の変化を見守っているはずなのにその土地にロバやヤギを放牧しているのだ。およそ日本的感覚では考えられない。その理由をスタッフに問うたところ「放っておくと全部森になってしまい、草地環境に住む生き物が住めなくなってしまうから」とのことであった。しかし、再生を見守っているのなら、それこそ自然の推移（遷移）にゆだね、人間は見守るべきなのではないだろうか？

よく言われるように、これは文化や宗教の違いによる自然感の違いなのだろう。いわゆる「日本の自然観」においては、人間は自然の一部である。人間は自然の一部でありそういう状態を昔の人は「自然（じねん）」とよんだ。これに対し、西洋の自然感は違う。自然に人間は含まれておらず、その自然を管理すべき存在が人間だ。自然を管理することは、神から与えられた人間の役割なのだ、というのが西洋的、キリスト教的自然感だと思う。

こういった話は過去に環境教育を学ぶ際によく耳にしてきた。そして今回実際にドイツを訪れてみて、まさにその通りだと腑に落ちた。ここまで感覚が違うものかと驚いたのである。これはとても大きなことだ。もし、日本でドイツの森の幼稚園の発表を聞いても、おそらく日本との違いはわからないだろう。

写真や映像でみるかぎり、日本のそれとまったく違いがわからないからだ。そういうことを考えた時、実際に現地に赴きさまざまな人の話をリアルに聞き、優れた通訳さんを通じて質疑応答ができ、本当のドイツの現場を知ることのできた今回の研修はまたとない貴重な機会だった。この場をお借りして、コーディネートを下さった小野さん、通訳の小島さん、添乗員の若井さん、6名の仲間達、そしてこの機会を与えて下さったセブンイレブン記念財団のみなさんや、寄付して下さいった全国の寄付者のみなさんに感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今回の研修は私にとって一生に一度のまたとない学びの機会でした。学ばせていただいた分は、今後の日本での環境活動を通じて恩返しをして行きたいと思っています。本当にありがとうございました。

以上